乳児のネガティブな情動表出に対する父親および母親の行動が幼児期のアタッチメント安定性に与える影響

福田　佳織・森下　葉子・尾形　和男
（東洋学園大学）　（文京学院大学）　（放送大学）

和文要約

本研究では、離乳食場面における乳児のネガティブな情動表出後の父親・母親の行動が幼児期のアタッチメント安定性に与える影響を明らかにすることを目的としている。まず、離乳期（生後9ヵ月以内）の乳児の家庭にて、親が乳児に離乳食を与える様子をビデオ撮影した。そして、その対象児が2歳前後の時点で再度家庭訪問し、親へのアタッチメント安定性をAQSにて測定した。両時点でのデータが揃っている6家庭の父子6ケース・母子5ケースを対象に、乳児のネガティブな情動表出後の親の行動のカテゴリーを作成した。そして、これらの行動のうち、乳児に対する直接的なポジティブ・ニュートラル対応表出率と幼児期のアタッチメント安定性との関連を検討した。その結果、親の行動パターンは13種（不明を除く）抽出され、うち8種は直接的なポジティブ・ニュートラル対応（対応行動）、5種は直接的に関与しない、あるいは、ややネガティブな行動（非対応行動）であり、乳児の強いネガティブ情動に対する親の対応行動の表出率と幼児期のアタッチメント安定性との間には、有意な正の相関が見られた。一方、弱いネガティブ情動に対する親の対応行動の表出率とアタッチメント安定性とは、無相関であった。

キーワード

アタッチメント安定性　ネガティブ情動　離乳食　AQS　乳児　父親　母親

問題と目的

不安や疲れ、恐れといったネガティブな情動状態に陥った時、個体が特定の個体に接近・接触することで心的安定を回復しようとする行動制御システムをアタッチメントと呼ぶ（Bowlby, 1982/1997）。幼少期において、このシステムがスムーズに循環するか、つまり、子ども自身がネガティブな情動状態に陥った際に、必要に応じて特定の人物（養育者や保育者といった日常的・継続的に養育に携わる者であり、親に限定されないが、本研究の対象は親であるため、以後、「親」と表記する）に接近・接触することで、その情動をフラットな状態に回復させることができるか否かは、その親の関与の在り方によるところが大きい。中でも、アタッチメントの形成に重要な影響を与えるとされるものが親の敏感性（sensitivity）である。敏感性とは、親が乳児のシグナルに迅速に気づき、正しく解釈し、適切

かつ迅速に対応するという親側の能力を指す（Ainsworth et al., 1978）。Hoffman et al.(2006)は、乳児のネガティブな情動に対して親が敏感に関わることが、子どもの安定したアタッチメントを形成するうえで重要であると指摘しており、乳児のネガティブな情動の親による立て直しの重要性が窺える。しかし、言葉で細かい要求を伝えられない乳児に対して、親が適切な対応を取ることは困難である。近年の研究では、乳児の要求に対する最初の段階での対応は半数、あるいは、３～４割ヒットすればよいことが示されているが、うまくヒットせず、乳児のネガティブな情動が継続、あるいは、増大すれば、親は試行錯誤しながら乳児への適切な対応にたどり着くことが重要になる（遠藤，2017）。

では、親は、乳児のネガティブな情動表出を感知し、それらに対してどれだけ試行錯誤しながら対応しているのだろうか。また、それは、その後の子どものアタッチメントにどう関係しているのだろうか。本研究では、乳児のネガティブ情動の表出が継続している場面を抽出し、その中で親がどのような行動を取るのか、また、それらの行動とその後の子どものアタッチメント安定性とがどう関連するのかについて検討する。

ところで、乳児のネガティブな情動表出に対し、親の試行錯誤を要する場面はどのような場面であろうか。ベネッセ教育総合研究所(2018)によれば、幼い子どもを持つ母親にとって、「離乳食・幼児食の与え方」は子育ての悩みで最も高いことが指摘されている。離乳開始期である生後５，６ヵ月頃を過ぎると、乳児は意思をもって行動するようになる。食事への集中が切れたり、眠くなったり、じっとしていたくなくなったり、食べたくなかったりすると、乳児は、あらゆる摂食外行動（親が口元に運んだ食べ物を食べない行動）を示して食事を中断しようとする。福田・森下・尾形(2020)は、乳児への食事供給行動（食べ物を乳児の口元に運び、食べさせようとする行動）に対する乳児の摂食行動（口に入れ飲み込む行動）は、個人差は大きいものの父母ともに３割程度であることを示した。このように、離乳期の食事はうまく進まないことが多い。その一方で、食は乳児の命や健康に深くかかわるものであり、親としては、よく噛んで、バランスよく、適切な量を食べてもらいたいと思う（厚生労働省，2019）。こうしたことから、離乳食場面は、親の試行錯誤が生じやすく、葛藤的な場面と言える。親にとって葛藤的な状況を用いることで、敏感性はより正確に測定されるといわれている（Smith & Pederson, 1988）ことから、離乳食場面での親の対応を観察することで、アタッチメント安定性との関連も検討し得ると考えられる。

また、子どものアタッチメントに影響する親子の特徴を捉えるにあたり、適した対象児の年齢（月齢）はいつ頃であろうか。アタッチメントの発達は、誕生時からの親等とのやり取りを通して形成される。そして、生後６，７ヵ月頃からその子どもにとっての初期のアタッチメント人物が定まり、徐々にその人物に対するアタッチメントの質の個人差が明確になる。アタッチメントの個人差の測定に用いられるストレンジシチュエーション法（SSP）やアタッチメントＱソート法（AQS）は、いずれも対象年齢が１歳からとなっており、その時期にアタッチメントの個人差が明確になることがわかる（Waters & Deane, 1985）。したがって、アタッチメントへの影響を検討するには、アタッチメントの質の形成途上にある月齢、つまり、１歳未満の子どもとその親の相互作用を観察することが適しているであろう。ただし、池谷・柳沢(2017)によれば、子どもの手づかみ食べ得点が最も高い月齢は生後

10ヵ月であるという。離乳食の大半を子どもが手づかみで食べる状況と親が子どもの口に運ぶ状況とでは、親の葛藤内容が変わってくる可能性がある。そこで、できるだけ状況の統一を図るため、対象児の月齢の上限は1歳ではなく、生後9ヵ月までとする。

そして、アタッチメント安定性への影響を検討するため、上記の調査協力家族の対象児が2歳前後になった時点で、AQSを用いたアタッチメント安定性の調査を実施する。本研究では、乳児期および幼児期の両データが揃っている6家庭11ケースの親子を分析対象とする。

方　法

(1) 対象者：関東圏在住で、対象児が離乳期（離乳食開始期～生後9ヵ月）に離乳食場面調査、および、対象児が2歳前後でアタッチメント安定性測定の調査に参加した6組12ケースの親子のうち、乳児のネガティブ情動の表出が5秒以上継続するシーンのあった父子6ケース、母子5ケースの6組11ケースを分析対象とした。6組11ケースの属性および幼児期の対父親・対母親のAQS得点（z変換後）は、Table 1のとおりである。AQSでは、およそr=.30以上は安定型、それより低い場合は不安定型とされる。

(2) 調査期間

2017年9月1日～2020年2月2日に調査を実施した。

(3) 調査手続き

著者の知人等を通して協力者の候補となる家庭に調査の概要を伝えた。そして、了承を得た家庭に対し、著者よりメールまたは電話連絡をした。その際、調査の詳細について書かれた説明書をメール添付または郵送し、その後、協力者の質問に応じた。その上で、最終的に調査協力を了承した家庭と調査日時のアポイントを取り、その日時に第一または第二執筆者1名が家庭訪問した。訪問時、調査者から今回の調査についての詳細を再度説明し、了承を得た場合に調査承諾書に署名をもらった。家庭訪問では、観察調査（ビデオ撮影）、および、質問紙調査、インタビュー調査を行った（順番は、協力者の都合によって異なる）が、本論文では、観察調査データのみを使用するため、質問紙調査、インタビュー調査の内容は割愛する。ただし、質問紙調査により得られた属性に関する情報（親の年代、および、子どもの月齢・性別）は使用する。撮影にあたっては、食事を与える親と乳児の二人きりの場面とすること、食事を食べきる必要はないこと、時間の制限を設けないことを説明した。撮影は、親子の顔ができるだけよく見える場所から行った。

対象児が2歳前後になった時点で、父親または母親に連絡を取り、アタッチメント安定性の調査（AQS）の依頼をした。承諾を得た家庭に、第一執筆者、第二執筆者、AQSに長けたその他の研究者のいずれか2名で訪問し、1時間半～2時間の日常場面の観察を行った。雨天以外は、屋内と屋外（公園、買い物、散歩等）で観察し、必要に応じて観察者が対象児に声をかけて反応をみた。父子の観察と母子の観察は、2週間以上の期間を空けて実施した。観察後は、観察者が独立でカードをソートし、

Table 1　対象者の属性およびAQS得点

	子性別	調査① 子月齢	調査② 子月齢	父年齢	母年齢	対父AQS	対母AQS
家族A	女	8ヵ月	2歳7ヵ月	20代	20代	.443	.833
家族B	女	7ヵ月	2歳6ヵ月	30代	30代	.628	.664
家族C	男	9ヵ月	2歳3ヵ月	30代	30代	.502	.271
家族D	男	8ヵ月	2歳4ヵ月	40代	30代	.457	.438
家族E	女	8ヵ月	1歳8ヵ月	30代	30代	.514	—
家族F	女	9ヵ月	2歳0ヵ月	20代	20代	.411	.455

ソートに大きな食い違いがあった箇所は、話し合いによりカードの位置を調整した。その後、各児のアタッチメント安定性得点を算出した。

(4) 映像データの分析方法

分析映像の長さを統一するため、離乳食場面の開始から1分間、食事時間中盤の1分間、食事終了までの1分間の計3分間を分析対象とし、そこで見られる親および乳児の行動の特徴を時系列で記述した。ただし、対象の親子以外の者が入ってきた場面（例えば、母子観察中に、乳児の視界に入る場所に父親が入ってきた場合など）の時間は除外して3分間になるようにした。

記述内容は、Biringen & Easterbrooks(2012)を参考に、①親の身体的な動き、②親の発話内容、③親の発話のトーン、④親の視線、⑤親の表情、⑥乳児の身体的な動き、⑦乳児の発声、⑧乳児の表情、⑨乳児の視線とした。③⑤⑦⑧については、ポジティブ、ニュートラル、ネガティブの3種について記述の上、ポジティブ・ネガティブ情動の強弱がわかるよう「強・中・弱」も記載した。ネガティブ情動に関しては、泣きや大きなぐずり声等、親が乳児に視線を向けていなくても音による認知が可能で、かつ、明らかにネガティブな情動状態であるものは「強」、不機嫌そうな発声、荒い息づかい等、親が乳児に視線を向けていなくても音による認知は可能であるが、「強」よりはネガティブな情動の表出が弱いものは「中」、しかめ面や退屈そうな表情といった表情のみで音声を伴わないため、親が乳児に視線を向けていないと認知できないものは「弱」とした。記述は親と乳児の行動が交互になるようにし、記述と記述の間はすべて1秒未満とした（1/1000秒単位で秒数も記載した）。記述する上で、親と乳児のいずれが先行刺激になっているのかわかるように留意した。そのため、記述間は等間隔にはなっていない。また、親の発話については、親の1ターン内に収まらない場合、次の親のターンに続きの発話内容を記述した。乳児のターンで親の発話が終わってしまう場合は、1ターン内の親の行動記述にすべての発話内容を記述した。また発話を2ターンに分ける場合は、意味がわかるよう区切って記述した。

いずれのケースにおいても、第一執筆者または第二執筆者が行動コーディングシステム（BECO 2）

で、動画のコマ送り（33～34/1000秒単位）や1/8倍速再生等を用い、1エピソードごとに複数回視聴の上、通常再生して、やり取りの文脈や発話に齟齬がないかを繰り返し確認して記述した。

これらの記述を終えたのち、第一執筆者の記述は第二あるいは第三執筆者が、第二執筆者の記述は第一執筆者が、動画視聴しながらチェックした。記述内容に疑義があった場合は、三者で動画と記述を確認し、より適切な記述について話し合い、記述の修正を行った。

そして、乳児のネガティブな情動表出に対して親が試行錯誤する対応をよりよく抽出するため、上記の計3分間の中で見られた乳児のネガティブ情動表出のうち5秒以上継続したシーンを分析対象とした。なお、上記3分間の中に5秒以上継続するネガティブ情動表出シーンがなかった場合は、序盤の1分間後の1分間、中盤の1分間後の1分間、終盤の1分間の前の1分間から5秒以上継続するネガティブ情動シーンを抽出した。これらから、乳児のネガティブ情動表出直後の親の行動を抽出し、カテゴリー化を行った。

(5) 人権の保護及び法令等の遵守への対応

調査にあたっては、対象者に「研究に関する説明書」（本研究の目的や内容、データの扱い、謝金、データ撤回等についての詳細が書かれた書類）を手渡し、調査者がそれを読み上げる形で対象者が確認した。これらの内容に十分な理解と了解を得られた場合に限り、「調査承諾書」への署名をもらい、調査に参加してもらった。また、承諾後も、対象者には何の不利益もなく、いつでもデータを消去できる自由があることを説明し、撤回書も配布した。

結　果

(1) 乳児のネガティブな情動表出直後の親の行動カテゴリー

父子および母子の離乳食場面の3分間に見られた乳児のネガティブ情動表出直後の親の行動を分析したところ、Table 2に示したカテゴリーが抽出された。①～⑧は、親が対象児に対して直接的にポジティブあるいはニュートラルな対応を取る行動である。これらは、親が乳児のネガティブな情動をいくらかでも改善させたり、それを理解しようと試みたりする行動、かつ、乳児にとっては親が自分に関与してくれていることが感じ取れる行動であり、程度の差はあるが、一人の乳児に対して多様な種類が表出されることから、いずれも乳児のネガティブ情動をニュートラルな情動（あるいはポジティブ情動）に変化させようとする試行錯誤行動とした。なお、①の身体接触は、抱っこしたまま食事を与えるような継続的な接触は含めない（抱っこの初回記述のみ含め、抱っこしながら乳児の頭をなでるなどの場合はカウントした）。⑨～⑬は、乳児への直接的な働きかけがないか、あるいは、いくぶんネガティブな働きかけをしている行動を示す。これらは、親が乳児のネガティブな情動を改善させたり理解しようと試みたりしていない、あるいは、乳児にとって親が自分に関与してくれていることを感じ取りにくい行動と考えられ、試行錯誤行動ではないと判断した。

(2) 乳児のネガティブ情動直後の親の試行錯誤行動の出現状況

Table 3は、乳児のネガティブな情動表出が5秒以上継続しているシーンの親子の6ターン分の行動記述のうち、乳児のネガティブな情動の具体的行動・強度およびその直後の親の行動カテゴリー番号を記したものである。実際は6ターン以上継続しているものもあるが、乳児のネガティブ情動表出が継続するほど、親が様々な行動を示して試行錯誤したり、逆に試行錯誤を止めて静観したりするなど、ネガティブ情動の表出継続時間の長短による影響が考えられるため、一律にネガティブ情動の表出開始から5秒間で区切った。また、乳児によって、5秒以上継続したシーンの頻度が異なり、最大4回となった。Table 3は、左からAQS得点の高いケース順（Table 1参照）に並んでいる。

Table 3に基づき、乳児のネガティブ情動の強度別の表出数とそれらへの親の試行錯誤行動（①～⑧）の表出数を表したものがFigure 1である。各強度のネガティブ情動や試行錯誤行動は、継続した

Table 2　乳児のネガティブな情動表出直後の親の行動カテゴリー

	カテゴリー	内容
①	身体接触	偶発的ではなく、親が意図的に頭をなでたり、手を掴んだりする。また、体勢が崩れてしまった場合に、身体を引き上げる等。
②	共感/代弁/模倣	「もう嫌になっちゃったね」等と共感したり、その気持ちを代弁したり、その気持ちを表すような表情をして見せる等。
③	アイコンタクト	対象児が親を見ている時に、親も対象児に視線を合わせる。
④	要求対応/代替提示	対象児が触りたい等の要求を示した物を渡したり、代わりの物を渡したりする等。
⑤	褒め	「今日はよく食べてるね」等と褒める。
⑥	質問	「どうした？」「眠くなっちゃった？」等と尋ねる。
⑦	説得/誘導/気分転換	「もう少し食べよう」等と説得したり誘導したり、食器の中を見せて「ほら、あとちょっとだよ」等と言う。
⑧	返事・発話のみの応答	対象児の発声や泣き等に対して「はいはい」「わかったよ」等と返事だけする等。
⑨	一人言/自己完結反応	「もう要らないかな」「終わりですね」と明らかに自問自答のように言う等。
⑩	視線のみ	対象児に視線を向けるのみ。 ※アイコンタクトはない。
⑪	他者への話しかけ	対象児に見えないように隠れていたもう一人の親や観察者に向けて「終わりかな」等と声をかける。
⑫	対応なし	対象児以外のところに視線を向け、食事を冷ましたり、食べ物をかき集めたりする作業等をし、対象児に直接かかわらない。
⑬	ネガティブ反応	いくぶんいらだった口調で発話する等。
⑭	不明	テーブルの下に落ちたものを拾ったり、物を取るために後ろを向いたりして、表情が見えず、なおかつ、発話もない。

Table 3　乳児のネガティブ情動の具体的行動・強度およびその直後の親の行動カテゴリー

	A母子		B母子			B父子	E父子	C父子			D父子		F母子	A父子	D母子			F父子				C母子			
AQS	.833		.664			.628	.514	.502			.457		.455	.443	.438			.411				.271			
セット数	2		3			1	1	3			2		1	1	3			4				4			
1	いくぶん不快そうな表情（弱N） ⑩	いくぶん不快そうな表情（弱N） ⑥⑦	いくぶん嫌そうな表情（弱N） ⑦	しかめ面（弱N） ⑦	いくぶん暗い表情（弱N） ①⑨	泣き（強N） ①	不快な叫び声（強N） ⑩	やや不快な表情（弱N） ⑫	ぐずり前の息づかい（弱N） ⑩	やや不快な発声（N） ⑩	泣き（強N） ②	いくぶん暗い表情（弱N） ⑩	不快な表情（弱N） ⑩	やや不快な発声（弱N） ②	ぐずり声（強N） ④	泣き（強N） ⑩	やや不快な表情（弱N） ⑦	やや不快な声（N） ⑩	不快な表情/ぐずり声（N） ⑩	奇声（強N） ①	泣き（強N） ①	やや不快な表情・行動（弱N） ⑨	大きなぐずり声（強N） ⑩	ぐずり声（強N） ⑫	やや沈んだ表情（弱N） ⑦
2	いくぶん不快そうな表情（弱N） ⑩	ぐずり声（強N） ②③	しかめ面荒い息づかい（N） ⑥	しかめ面荒い息づかい（N） ①⑥	ぐずり声（強N） ①	泣き（強N） ①⑥	不快な叫び声（強N） ②	やや不快な表情（弱N） ⑫	やや不快な表情と発声（N） ⑩	不快な発声と表情（N） ⑩	泣き（強N） ②	いくぶん暗い表情（弱N） ⑥	泣き（強N） ⑫	やや不快な発声（弱N） ②	ぐずり声（強N） ⑥	泣き（強N） ⑨	のけぞり（弱N） ⑦	泣き（強N） ⑫	不快な表情（弱N） ⑩	不快な表情（弱N） ⑬	奇声（強N） ①	やや不快な表情・行動（弱N） ⑧	大きなぐずり声（強N） ⑦	ぐずり声（強N） ⑫	やや沈んだ表情（弱N） ⑩
3	泣き（強N） ②	泣き（強N） ①⑦	しかめ面荒い息づかい（N） ⑬	しかめ面（N） ⑥	しかめ面荒い息づかい（N） ①⑦	泣き（強N） ⑥	不快な叫び声（強N） ②	やや不快な表情（弱N） ⑫	不快な発声（N） ③	泣き（強N） ⑦	泣き（強N） ⑫	いくぶん暗い表情（弱N） ⑩	泣き（強N） ①	やや不快な表情（弱N） ⑫	ぐずり声（強N） ④	泣き（強N） ⑩	ぐずり声・横倒（強N） ①	泣き（強N） ⑫	不快な表情（弱N） ⑧	奇声（強N） ①	泣き前の荒い息づかい（N） ⑩	ぐずり声（強N） ⑫	大きなぐずり声（強N） ⑩	激しい泣き（強N） ⑫	不快な発声（N） ⑩
4	泣き（強N） ②	泣き（強N） ⑫	泣き（強N） ①⑥	やや不快な発声（N） ②	泣き（強N） ①⑦	泣き（強N） ⑥	不快な叫び声（強N） ⑩	やや不快な表情（弱N） ④	やや不快な発声（弱N） ⑤	不快な表情（弱N） ⑩	泣き（強N） ⑫	ぐずり声（強N） ⑩	泣き（強N） ①	弱いぐずり声（N） ⑥	ぐずり声（強N） ②	やや不快な発声（弱N） ⑥	泣き（強N） ①	ぐずり声（強N） ⑩	不快な表情（弱N） ⑩	泣き（強N） ①	泣き（強N） ⑦	ぐずり声（強N） ⑫	ぐずり声（強N） ④	大声叫び・泣き（強N） ⑫	ぐずり声（強N） ⑩
5	泣き（強N） ⑥	泣き（強N） ⑧	泣き（強N） ⑥	やや不快な発声（N） ⑥	泣き（強N） ①	泣き（強N） ⑥	不快な叫び声（強N） ②	やや不快な表情（弱N） ⑥	不快な発声（N） ④	か弱いぐずり声（N） ①	泣き前の息づかい/不快な表情（N） ⑫	ぐずり泣き（強N） ⑬	泣き（強N） ①	不快な表情（弱N） ⑫	やや沈んだ表情（弱N） ⑩	やや不快な表情（弱N） ①	泣き（強N） ⑩	ぐずり声（強N） ①	不快な声（N） ⑩	泣き（強N） ①	泣き（強N） ⑩	ややぐずり声（N） ⑫	ぐずり声（強N） ③	大声叫び・泣き（強N） ⑫	ぐずり声（強N） ⑩
6	泣き（強N） ④	泣き（強N） ⑩	泣き（強N） ②	しかめ面（弱N） ②	泣き（強N） ①⑥	泣きそうな表情（弱N） ⑨	不快な不快な叫び声（強N） ②	やや不快な表情（弱N） ④	激しく泣く（強N） ⑥	か弱いぐずり声（N） ①⑤	泣き（強N） ⑫	いくぶん暗い表情（弱N） ⑫	不快な表情（弱N） ①⑨	不快な表情（弱N） ⑦	やや沈んだ表情（弱N） ①	やや不快な表情（弱N） ⑩	泣き（強N） ⑩	不快な表情（弱N） ①	泣き(強N) ⑩	泣き（強N） ⑩	泣き（強N） ⑩	ぐずり声（強N） ⑩	か弱いぐずり声・不快な表情（N） ⑦	不快な発声（N） ⑩	ぐずり声（強N） ⑩

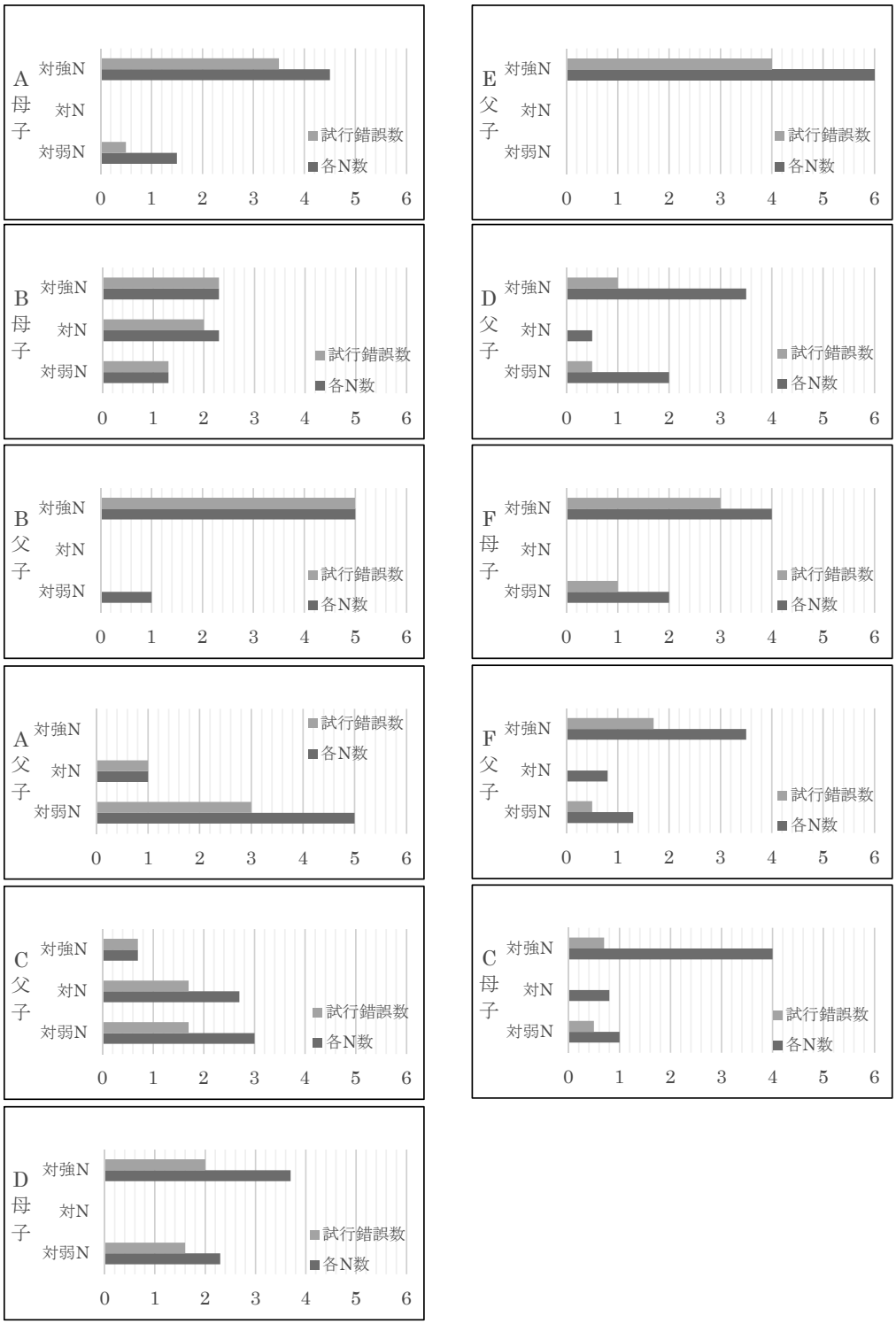

Figure 1　乳児の強度別ネガティブ情動の表出数および親の試行錯誤行動表出数

ネガティブ情動1セット6ターン中何度表出・出現したかを示しており、セット数が複数ある場合は、そのセット数で割っている。このFigure 1の通り、ネガティブ情動の表出強度によって親の試行錯誤行動の出現率が異なる。全体的に、強い表出に対しては66.81％、中程度の表出に対しては41.67％、弱い表出に対しては48.30％という出現率であり、ネガティブ情動が強く表出される場合に、試行錯誤行動が出現しやすいことが窺える。ただし、該当する強度のネガティブ情動が表出されていなかったり、頻度が少なかったりするケースもあることにも留意する必要がある。特に中程度の表出に関しては、11ケース中5ケースで表出なしとなっている。

(3) 乳児のネガティブ情動表出直後の親の行動とアタッチメント安定性との関連

ネガティブ情動表出の強度別に、親の試行錯誤行動の表出率と幼児期のAQS得点（アタッチメント安定性得点）とのピアソンの相関分析を行ったところ、弱い表出とAQSとの間には、有意な相関は見られなかった（$r=-.045$, n.s.）が、強い表出とAQSとの間には、有意な正の相関が示された（$r=.679$, $p<.05$）。このことから、乳児がネガティブな情動を表出している最初の5秒間に見られた強いネガティブ情動の表出に対して、親が、身体接触、共感・代弁・模倣、質問、短い返事などの試行錯誤行動を取ることが、後のアタッチメント安定性にポジティブな影響をもたらす可能性が示唆された。なお、先述の通り、中程度のネガティブ情動を表出した乳児が少ないため、分析を行わなかった。

考　察

(1) 乳児のネガティブな情動表出直後の親の行動カテゴリー

乳児のネガティブな情動表出直後に親がどのような行動を取るかについて、動画を分析したところ、不明を除く13種の行動が抽出された。全く対応しない行動や視線だけを向ける行動、親の自問自答や調査者等に声をかける、あるいは、いくぶんイライラした調子で発話するといった行動以外は、乳児のネガティブな情動をいくらかでも改善しようとしたり、その情動に理解を示したり、原因を考えたりするような、乳児の要求に対する試行錯誤行動であった。

先述の通り、親は試行錯誤しながら乳児への適切な対応にたどり着くことが重要になる（遠藤, 2017）が、その手段は多種多様であることが示された。

(2) 乳児のネガティブ情動直後の親の試行錯誤行動の出現状況

乳児のネガティブ情動直後に、親はどの程度、試行錯誤行動を取るのかについて検討した。そもそも、今回、中程度のネガティブ情動を表出した乳児は11ケース中6名と少なく、また、弱い表出の頻度も強い表出と比べると少なかった。全体的に、強い表出に対して、親は試行錯誤行動を取る傾向が示された。本研究での弱い表出とは、表情や行動のみがネガティブで、音声を伴わないものが該当する。そのため、乳児に与える食べ物を混ぜたり掬ったりするために、そちらに視線を向けていると見逃すことも多い。それに対し、強い表出は、大きな泣き声やぐずり声などを発しているもの、つまり、親が乳児に視線を向けていなくても、乳児の状況が耳に入るものが該当する。そのため、何らかの対

応が出現しやすくなると考えられる。それでも、対応したのは、全体的には6～7割程度である。ただし、後述の通り、そこには親の個人差がみられた。

(3) 乳児のネガティブ情動表出直後の親の行動とアタッチメント安定性との関連

ネガティブ情動表出の強度別（強と弱のみ）に、親の試行錯誤行動の出現率と幼児期のAQS得点（アタッチメント安定性得点）とのピアソンの相関分析を行ったところ、弱い表出とAQSとの間には、有意な相関は見られなかったが、強い表出とAQSとの間には、有意な正の相関が示された。まず、今回の分析においては、乳児のネガティブ情動が表出され始めてから5秒間の親の対応を抽出しており、ここで試行錯誤行動が多くみられているということから、初動の早さが窺える。アタッチメントに関与するといわれる親の敏感性は、先述の通り、親が乳児のシグナルに迅速に気づき、正しく解釈し、適切かつ迅速に対応するという親側の能力を指す（Ainsworth et al., 1978）。つまり、乳児のネガティブ情動に迅速に対応することがアタッチメント安定性を高めることにつながったのではないかと考えられる。

ただし、Figure 1を見ると、父親に対して安定型のアタッチメント安定性（r=.30 以上）であるD父子ケースは、強いネガティブ情動の表出に対する試行錯誤行動の出現率が低い。これは、母親に対して不安定型のアタッチメント安定性（r=.30 未満）を持つC母子と類似している。なぜ、アタッチメント安定性にこうした相違がみられたのであろうか。その要因として考えられることは、ネガティブ情動表出以外のシーンでの対応である。近藤ら(2006)では、乳児のネガティブな情動への敏感性より、乳児の意図的行動への敏感性の方が、Ainsworthの敏感性尺度との関連性が高いことを示している。こうした側面での親の行動についても検討することで、両者の差異の要因が明確になると考えられる。

今後の課題

本研究では、離乳食場面における乳児のネガティブな情動表出後の父親・母親の行動が幼児期のアタッチメント安定性に与える影響を明らかにすることを目的とし、乳児のネガティブ情動が5秒以上表出された最初の5秒間親子6ターンを抽出し、そこで見られた親の行動をカテゴリー化した。そして、乳児の情動表出の強度別（今回は強い表出と弱い表出のみ）に、親が乳児に対して直接的にポジティブあるいはニュートラルな対応を行った平均回数とその後のアタッチメント安定性との相関分析を行ったところ、弱い表出では有意な相関が見られなかったが、強い表出では、親が上記の対応を取るほど幼児期のアタッチメント安定性が高くなることが示された。

しかし、乳児がネガティブな情動を5秒以上表出しないケースは分析できず、また、食事のどの段階で表出したのかについても、ケース間で統一されていなかった。さらに、乳児の特徴も重要であり、その特徴は部分的にではあるが、養育環境の状態を決めていく（Sroufe et al., 2005）というように、親がいかに乳児の情動状態に気づき、適切に対応できるかは、乳児の特徴によるところも大きい。つまり、親子双方の特徴の相互作用が子どもの発達に影響を及ぼすということである。これらのことから、両者の特徴を捉えた分析が必要であると考えられる。また先述のとおり、ネガティブ情動の表出シー

ンのみならず、ポジティブ情動や意図的行動の表出場面も分析し、様々な観点から親の対応を捉える必要があると考えられる。さらに、ケース数を増やし、同様のタイミング、例えば、食事の序盤、中盤、終盤ごとに分け、それぞれのタイミングでネガティブ情動を表出したケース同士を分析することで、表出のタイミングから生じる影響を推測できるのではないだろうか。

これらの点を考慮し、今後の研究を進めていくこととする。

謝辞

本研究の実施にあたり、科学研究費（基盤研究（C）（一般）課題番号17K04366，研究代表者：福田佳織）を受けた。また、調査の実施にあたり、ご協力を頂いた皆様に心より感謝申し上げる。

引用文献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. S., Waters, E., & Wall, S. 1978 Patterns of attachment:A psychological study of the strange situation. Oxford: Lawrence Erlbaum.

ベネッセ教育総合研究所 2018 乳幼児の生活と育ちに関する調査 2017 0-1歳児編 ベネッセコーポレーション

Biringen, Z., & Easterbrooks, M.A. 2012 The integration of emotional availability（EA）into a developmental psychopathology framework: Reflections on the special issue and future directions. Development and Psychopathology, 24（1）, 137-142.

Bowlby, J. 1982 Attachment and loss: Vol.1 Attachment. New York: Basic Books. 黒田実郎・大羽蓁・岡田洋子・黒田聖一（訳）1997 母子関係の理論：Ⅰ愛着行動（三訂版）岩崎学術出版社

遠藤利彦 2017 赤ちゃんの発達とアタッチメント ひとなる書房

福田佳織・森下葉子・尾形和男 2020 父親・母親の食事供給行動に対する乳児の摂食外行動の出現状況ー離乳食場面の観察からー 東洋学園大学紀要，28，33-44

Hoffman, T. K., Marvin, S. R. Cooper, G., & Powell, B. 2006 Changing toddlers' and preschoolers' attachment classifications: The circle of security intervention. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 74（6）, 1017-1026.

池谷真梨子・柳沢幸 2017 保育所における手づかみ食べに対する取組みの現状と保育士からみた手づかみ食べの意義とその関連要因 日本家政学会誌，68（2），70-79

近藤清美・井上望・中野茂・草薙恵美子 2006 アタッチメントに関わる母親の敏感性概念の検討 北海道医療大学心理科学部研究紀要，2，13-24

厚生労働省 2019 授乳・離乳の支援ガイド（2019年度改訂版）
https://www.mhlw.go.jp/content/11908000/000496257.pdf（アクセス日：2023年8月21日）

Smith, P. B., & Pederson, D. R. 1988 Maternal sensitivity, and patterns of infant-mother attachment. Child Development, 59, 1097-1101.

Sroufe, L.A., Egeland, B., Carlson, W.A. 2005 The development of the person: The Minnesota Study of Risk and Adaptation from birth to adulthood. New York, NY: Guilford Press.

Waters,E., & Deane,K. 1985 Defining and assessing individual differences in attachment relationships: Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton, & E. Waters（Eds.）, Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development, 50, 41-65.